

松倉豊後守重政の涙

福田 八郎

島原の乱時の領主松倉長門守重治の家臣佐野弥七左衛門の参戦『覚え書』の冒頭は次の文より始まっている。

寛永十四年(一六三七)十月二十日、島原吉利支丹蜂起の次第。

肥後・肥前の辺は、古は大方吉利支丹にてご座候へども、ご当代ご法度になり申し候故、皆ころび申し候。

元和二年(一六二六)六月、奈良五條二見城主松倉豊後守重政が、はるばる九州島原の地へ来たのは、「大阪の役」での勲功によるものであり、併せて九州諸侯の監視と前島原城主有馬直純が宮崎・日向へ転封の後、公領となった島原の地で行われていた吉利支丹宗門の根絶が、「大阪の役」で中断していたのを継続再開する役目を帯びていたと思われる。単なる勲功の処遇のみではなかったのである。

島原で、前代より厚遇されていた仏僧七名が、改めて禄高と特権の確認に来た時、重政は、「自分は神も仏も崇拜しない禅宗徒なので、仏僧を必要としない」と言った―とモレ

ホンは『日本殉教録』に記している。

これは重政の宗教的立場を示したものと注目される。

重政は、有馬・日野江城に着くや、その年の末には島原へ居を移し、元和四年(一六二八)から森嶽城の築城に着手している。領民を築城工事に駆り立てることで、いかなる徴候をも抑え込もうとする意図があったと思われる。

永禄六年(一五六三)六月、大村純忠は、横瀬浦でキリスト教へ入信。その殷賑ぶりを見聞した純忠の兄



平成22年6月、崩落した島原城石垣の石に十字架の紋様が見て取れる

井定次は、実はキリシタン故であったことなども、重政の脳裏にはしっかりと刻まれていたはずである。

慶長十九年(一六一四)九月、幕府の『バテレン大追放令』により、百四十八人のキリシタン等がマカオ・フィリピンへ追放となっている。

元和七年(一六二二)十二月、潜伏中の有馬八良尾から夜半、日野江城下へ急ぎ下ってきたイエズス会管区長顧問駐在所長のナバルロ神父が、三人の伴侶と共に逮捕されている。

このことは「領内にバテレンはいない」と広言していた重政を当惑させたが、逮捕の噂は掩い難く、やむなく島原へ召致し、キリシタンのアンデレ孫右衛門に預けとした。

重政はこの機に「信仰の真理」を知りたいと、城内にナバルロを呼んだ。その時、重政はナバルロの話聞き「ゴモットモゴザル―そのようなことであつたか」と頷き、後日、「日本の宗旨では慰安もなく救いも得られぬ。デウスの教えに自分も入りたいものだ」との感想を漏らしたと伝えられている。果たしてそうであつたか。然し、幕府の断は「火炙り」であつた。刑場で「願わくば殿も信仰に入られて、天上でお目にかかりたい」というと重政は、黙然として涙を流したという。

寛永二年(一六二五)、領内の一揆で島原城落城。幕府はこの時、重政の「キリシタン禁制」の手緩さを糾弾。割腹・改易を危惧した重政は、家臣を督励し、領内でイエズス会管区長フランシスコ・パセヨ、有馬学院長のヨハネ・バプチスタ・ゾラなどを宿主と共に逮捕処刑した。

寛永四年(一六二七)からは、重政「雲仙地獄の熱湯」での信徒迫害を始める。寛永五、六年と重政を含む幕府側のキリシタン弾圧は猖獗を極めた。ところが一向に改宗の効果がないことで、重政の窮余の決断は、キリシタンの根拠地であるフィリピンへ遠征し、宣教師の供給源を絶つことであつた。

寛永七年(一六三〇)十一月十日、長崎奉行竹中采女正と重政らは、ルソンへの遠征偵察使を派遣する。その夜、幕府の外交政策上の思惑と竹中の「島原領転封」の欲望から、重政は「毒殺された」と、家臣山本権兵衛の『松倉重政軍場日記』は伝えている。(加津佐史談会)

風信

○五月と言えば「夏も近づく八十八夜」、そして其の八十八夜が今年は五月二日、次に五月五日は男子の節句。長崎の旧記によれば「五日は端午の節句、家々軒に萱に蓬をそえて搓し布のぼりを立て、吹貫・鯉に風車を竹竿の

有馬義貞、父晴純仙巖、島原純茂ら、口之津港でのポルトガルとの交易を考え、横瀬浦にいたトルレス師に宣教師の派遣を願って、ルイス・アルメイダ修道士を有馬に迎え入れた。これが有馬領内でのキリシタン布教開始であるが、この年の有馬家は、台頭著しい佐賀の龍造寺隆信に肥前小城郡丹坂峠の戦で敗れ、同盟の伊佐早直堯・島原純茂が守る佐賀県藤津郡多久城までも陥落させられる衰退期にあつた。

この外庄と内紛により当時の有馬領内は混乱の極度に達していた。その有馬領内にキリスト教の布教が行われるのは、天正八年(一五八〇)、領主有馬晴信が巡察師ヴァリニャーノから洗礼を受けてからのことになろう。

豊臣秀吉が朝鮮出兵で唐津名護屋を兵站基地とした処は、当時波多三河守親の領地であつた。

「わずか数ヶ月間で関白殿の広大な宮殿と城の諸事業は見事に竣工した。のみならずその短期間に同所には全く新しい一都市が出現した」とフロイスは記述している。

文禄元年(一五九二)四月二十五日、その名護屋へ豊臣秀吉が着陣した。名護屋の在陣八十将、兵員十万二千三百名。遠征七十五将、兵員二十万一千二百名。在陣八十将の中に、キリシタン大名は近江日野城主蒲生氏郷や前田利家家臣の高山右近もいた。この二人は、離日のため長崎で船待ちをしていたヴァリニャーノ師を二度までも尋ねている。またかつての主人伊賀上野の城主筒井定次も、信長襲撃で明智光秀側に就いた三箇城主マンシヨ頼連を召し抱えていたが、その影響もあつてか、名護屋滞留中に長崎に出掛け洗礼を受け、キリシタンとなっている。

当時重政は、小姓として秀吉側近にいたので、これらの動向は十分把握していたであろう。それから蒲生氏の夭折や高山氏のフィリピン追放、慶長十三年(一六〇八)六月には、「大阪城秀頼への内通、領国の悪政、酒色への耽溺」などを理由として改易処分を受け、死に追いやられた筒

頭上にゆひ付け鈴をつける」とある。

○この節句三日の間、家々萱ちまき、竹の葉ちまき、唐あく綜をつくる。但し遊里にては統または縹子などに入れた小さき綜をつくり客に送る。客これを得て大いによろこぶ。之を常に懐中にすれば運つよきよし。

○六日は災難に打ち勝つとて菖蒲湯を煎じて浴す。菖蒲は勝負とて、市中の貴賤老若いずれも船を浮べてハイロンを楽しむ。見物おびただし、この時、知音・ひいきの筋に酒樽等を相贈る。

○ハイロンの註に、「唐船の伝えたる競龍船也」とある。ハイロンは現在ペーロンと言っている。一六一七年五月の平戸オランダ商館コックス日記にも記録があるので、当時すでに平戸に入港した唐人の人達によって行われていた事がわかる。因みに長崎の港に唐船が初めて入港したのは稲佐悟真寺創立の時期と考え、一六〇〇年前後だとされている。

○ペーロンの参考文献としては、『長崎市史風俗編第三章特種なる行事』(古賀二郎編)長崎ペーロンとその周辺(柴田恵司・高山久明著 海史研究第三八七号)○五月三十一日午後二時より本協会並びに長崎日本ポルトガル協会後援で、第五十三回長崎キリシタン文化研究会が開催される。我が国のキリシタン研究会で地方にキリシタン文化研究会が発足したのは長崎が最初で、当時片岡弥吉先生、二十六聖人の結城神父が中心になられていた。

今年の研究会では我が国の茶道文化とキリシタン文化との交渉ならびに食文化研究の第一人者熊倉功夫先生が、長崎キリシタン史と関係の深い「高山右近の生涯」の講演がある。参加申し込みは往復はがきにて純心大学まで。(会場・長崎歴史文化博物館一階ホール)

○今月ご寄贈いただいた書籍

一、野村美術館より『研究紀要2014―23』。論文、研究ノート、調査報告、資料紹介と野村得庵茶会記(翻刻)。スムット二女史の「イエズス会と茶道の研究」。大いに参考になる研究であつた。

一、長崎県立美術館より『館報2012年報』と『研究紀要』を中心に「ロペス展」、「横手貞美展」、「富永直樹展」、「渡辺千尋の仕事」等各図録。

一、下川達彌先生より『オランダ国立古文書館所蔵商館長日誌目録(1609-1860)』。M. P. Hルーション氏が編纂された物を下川先生監修のもと日本語版として発刊された資料本で日蘭関係研究資料の一つである。(福島県立医科大学刊)

長崎歴史文化協会 研究室

TEL 八二二一五四〇

十八銀行公会堂前出張所 2F

